



YMCA KOBE

YMCA NEWS

神戸青年

No. 601

2010.4

April

発行所 日本YMCA同盟 東京都新宿区本塩町7
THE YMCA神戸版 発行人/水野 雄二 編集人/坂本 庸秀
神戸YMCA 〒650-0001 神戸市中央区加納町2-7-15
TEL . 078-241-7201 FAX . 078-241-7479
URL http://www.kobeymca.or.jp 印刷/わかばやし印刷



神戸YMCA
年間聖句

主を待ち望め。雄々しくあれ、心を強くせよ。
(詩編27編14節)



神戸YMCA創立記念日礼拝

神戸YMCAは、1886年(明治19年)5月8日に諏訪山にあった紅葉館で発会式をあげ、この5月に124周年を迎えます。125周年を来年に控えた今年の創立記念日は、記念礼拝をもって創立当時の指導者たちの志をあらためて思い起こすと同時に、未来に向かって私たちの志を確認したいと願います。どなたでもご参加ください。

メッセージ: YMCAの歴史を支えてきたもの
~ YMCA運動史編集から見たもの ~
坂口 順治氏
(東京YMCA名誉会員・元平安女学院大学学長)

プログラム: 第27回タイ・ユースワークキャンプ報告
(予定) 神戸YMCA混声合唱団くさぶえの合唱

日時: 5月8日(土) 5:00 ~ 6:30p.m.

会場: 神戸YMCAチャペル



日本基督教団 主恩教会
牧師 相浦 和生

「Y M C A の皆様方に、
「イースター
おめでとございませう」と
「あいさつ申し上げます」と

「イースター おめでとございませう」。毎年、イースターの礼拝説教の冒頭でわたしは必ずこのように申してきました。教会員・会友の方々も「おめでとございませう」と応えてくださいました。このあいさつは神様にささげる最高の信仰告白であると信じています。

ではイースターは何故おめでたのでしょうか。答は、「イースターのめぐみによって教会が誕生したから」「イースターのめぐみによってYMCAが誕生したから」です。イースターは日本語で「復活日」で「復活? 死んだ人間が復活するなんて信じられない」。多くの人々はそのように思っています。しかし、イースターに思うことはそのことだけでしょうか。
ハイデルベルグ信仰問答の問45は「キリストの『よみがえり』は、わたしたちにどのような益をもたらしますか。」ですが、答の中に「第二に、その御力によってわたしたちも今や新しい命に生き返らされている、ということ。…」とあります。即ち、「神が計画なさったこと、約束なさったことは必ず実現する」ということです。こ

れがキリスト教信仰の核心です。教会牧師館に各国から集められた十数個の「イースターエッグ」があります。色とりどりにデザインされている芸術作品ともいえます。イースターエッグで「碁(そったく)」ということばを思い出します。碁はひなが卵の殻を破って出ようとして鳴く声、啄(は)は母鳥が殻をつつき割る音です。
YMCAの中で「イースターおめでとございませう」のあいさつが響きわたる時、神様は必ずYMCAに新しい命をくださいます。

サポートプログラム 15周年記念講演会と報告

1994年に西宮YMCAでスタートした発達障がい児サポートプログラムが15年の節目を迎えたことを記念して、2月28日(日)「コミュニケーションの力を育む」をテーマに講演会を行いました。

前半の基調講演は、言語聴覚士で「子どもの発達支援を考えるSTの会」代表の中川信子氏をお招きして、お話をいただきました。実践や具体的な事例を通じた内容はとても分かりやすく参加者の方々はうんうんとうなずきながらメモをとっておられました。「子どもは、球根」のようなもので、育ちどきも出来上がり(咲く花)も違うもの、「一番大切なのは、大人が子どもの「伝えたい気持ち」を育てること」などのコミュニケーションの土台の話や、「発達障がいバンザイ!!」といえ



るような社会づくりを目指そうとのお話がありました。後半のシンポジウムでは、サポートプログラムスーパーバイザーの竹田契一氏の司会の下で、元主任講師の西岡有香氏、吹田市教育センターの森田安徳氏、西宮YMCAアトリエクラスの藤井昌子氏、神戸YMCA総事務の水野雄二氏の4名の方々にさまざまな視点から「コミュニケーションの力を育む」ことについてお話をさせていただきました。どなたも、子どもたちの活動経験が豊富な方ばかりで、内容はとてもリアリティがあり、子どもたちのために!!という思いが伝わってくるシンポジウムとなりました。子どもたちを取り巻く環境が変化していく中で、家庭だけではなく、学校や、YMCAのような民間機関・病院、行政などの公的機関、地域や社会といったチームワークでのサポートの大切さを感じることが出来ました。

当日は、約250名の方々に越えただき、盛大に行うことが出来ました。多くの参加者の方々の目当てにして、改めて発達障がいへの関心の高さを知ったとともに、子どもたちへのよりいっそうの支援の必要性を感じた一日となりました。



先日、新聞のある記事が目にとまりました。英国の航空会社が、機内アナウンスを飛行機の目的地の方言でする、そんなユニークなサービスを、イタリアの国内線ではじめたそうです。イタリアも日本と同じで、方言が沢山あり地方によって微妙に言葉がちがうそうです。「村の数だけ方言がある。」ともいわれています。旅を日常生活により近づけ、家にいるようなくつろいだ気分になつてほしいというのが、新サービスのねらいです。離陸時や揺れた時の万国共通のアナウンスは、「安全のため、シートベルトをお締めください。」「特派員の出身地の広島弁にすると、危ないけえ、シートベルトをつけんさい」となるそうです。では、神戸弁では、「危ないけど、シートベルトつけとぅ?」でしょうかある作家が、若い頃自分の訛りが、恥ずかしくて、食堂でなかなか注文が、できなかったそうなんです。だが後年、それが持ち味となりその作家の語りは、炉辺談話の趣をかもし、人気となったと聞きます。2月、専門学校で、ホテル学科の実習発表会が行われました。ある学生が、緊張のホテル実習の毎日、ある日お客様の会話から聞きなれた自分のふるさとの言葉がきこえてきたそうです。ふっと、いままでの緊張のときがほぐれて、和やかな、暖かいサーブスができ、実りある実習を終えました。人を暖かい気持ちにさせるふるさとの言葉は、大事にしたいものです。
(浜瀬 真知子)

